

無想録十七 生活の三階段

徳山の遠石の石田家の講演がすんで帰る時のことであつた。忙しい私は明日を有効に使用するために夜行で広島に帰ることにした。それはいつものことだ。夜十二時すぎの汽車であるが、その発車よりも三十分以上早い時間を頼んでおいた。ところが、自動車が出来ない。門に出て待つてっていると、やっと来た。私の時計では発車まで二分しかない。万一を思つて乗ると、走るは走るは、半里以上もあるのを二分で走つた。駅に着くと、汽車はするすると発車しつつかつた。その次の汽車まで待たねばならない。お見送り下さる皆様が何もしないで待つて下さる。総勘定するをたいした時間だ。そして私にとっては明日の仕事にそれだけの損だ。そう一分早かつたらこの時間だけ損をしないですんだことだ。

十月二十五日米子支部に発つ朝、夜の三時半の汽車に乗らねば、昼席の鉄道局後藤工場の講演に間に合わない。だがタクシーは前の日に頼んだとおり、三時前にぴたと来てくれた。拝みたいほど嬉しかった。何ものにもかえられない。私は将来、少しは高いにしても、このタクシーを頼むであろう。

当然しなければならぬことをするということ。われらの充実した生活はそこいらなされなくてはならない。

妻には妻が当然しなくてはならないことがある。夫には夫として当然しなくてはならないことがある。子には子、親には親、兄には兄、弟には弟、それぞれがなさねばならぬことがある。この当然なさねばならぬことから実行して、はじめて私の生活が生きてくるのだ。だが、われわれは考えて見れば見るだけ、当然なすべきことをすら、あまりに多く怠つてはいないか。

当然なすべきことを怠つていような時、その放逸なわざりの相の後には必ず何か嫌なものか、単食たんじきつていような時である。

夫が会社から疲れて帰つた時、気を腐らして帰つた時、いそいそと妻が洋服をとる、当然のことである。その当然のことが夫の心を明るく転換する。

その時もし妻がヒステリーをおこして寝ていたら、ふくれ面して坐つていたら、夫の心はどうなるだろう。

親を「邪見な」と言う前に、親を上座に坐らせて、子供としての当然な相、合掌して尊敬して大事にしたら、親の心はどうなるだろう。

歩哨に立っている兵卒の前に、ナポレオンは、皇帝の相をかくして、警戒線を通過しようとした。歩哨は上官の命なしとて通さなかつた。ナポレオンは、その兵をすぐ
に重く用いたということである。

当然すべきことを、雨の日も風の日も、陰でも陽で、必ずやりとげてゆく人にして、
はじめて安心して事を托することができる。この人は必ず重んぜられる人である。

聖人たちが、道を広め、大法を伝導したのは、だれに頼まれたわけでもない。貧苦
と、迫害と、悪罵と戦いつつ、頼まれない仕事に全身を打込んだのである。

私はある日涅槃経をいただいた。釈尊に最後にお食物を供養したのは、ジュンダで
あつた。釈尊は哀れな自分をおそれ入っているジュンダに、ジュンダの供養の徳の尊
いことをおほめになり、尼蓮禪河にれんぜんがのほとりで正覚の時、ご供養した女たちと、同じ功
徳のあることを説かれ、多くの比丘たちは彼を讃嘆合掌して「南無ジュンダ、南無
ジュンダ」とくり返している。泣かずには読まれない。

その日だつた。Sさんから、こんな意味のお手紙を受けた。

私の家は今、破産して、田畑山林、借家も人手に渡り、本宅もまさに他人の手に渡
ろうとしています。先生のお耳をけがすのは心苦しく思いますが、私の村では、団の
運動は絶望である。しかし小さいながらも、熱のないながらも、光明団精神にむかつて
て精進するつもりであります。今後ともお見捨てなく導いて下さい。講習の決議、先
生に対する御恩、しかも家庭の事情で、私の本部建設費、金二十円也献金したいと思
います。しかも今月より月五円ずつ、月賦にして払い込ましていただきます……。

私はただ合掌した。この方の二十円のお金、毎月の月給からのご報酬、お金の中に
盛られたみ心である。

だれに強いられたのでもない。

人生に徹底し、信念に徹底し、はつきりと真理にふれると、必ず第三の天地がその
人のものになる。

論理を超え、能不能を越え、毀誉をこえて、無条件に、無報酬に、全身全霊を現前
の生活に打込んで生きてゆく。

身施とは、われ自らを献じて生きることである。

人生には、お金を出せば得られるものがある。

人生には口先で得られるものがある。

人生には少し小知恵を動かせば得られるものがある。

けれども、人生には、自己の全身全霊をなげ出さねば得られないものがある。

釈尊はそれを得られたのだ。

親鸞聖人は、自力以上の自力、一生をかけて、このものを獲得し、生活せられたのである。

二たす二は四である。だが人生には、一たす一は一という式を書いたり、一引く一は一という式を書いた、エマーソンやピタゴラスがいる。

人生には「零」という数がある。零こそは実に偉大であり、絶対である。

$1 \times 0 = 0$ $100 \times 0 = 0$ 何に零をかけても、ついにゼロである。ゼロは数の極である。

涅槃は「妙有」の本質たるべき虚無である。零である。虚無なるがゆえによく妙有を妙有たらしむるのである。だから涅槃は二かけの二は四と出る世界ではない。一切に普遍の光と命とを与えるゼロである。

涅槃が果であれば、信は因である。涅槃も仏性であれば、信も仏性である。涅槃にふれてゆくものは、純粹なる直観すなわち至純なる信である。涅槃が零であれば、信もまたゼロである、絶対である。

善悪、賢愚、苦楽、淨穢等々の対立、およびその囚われは、ただこの信の天地において、解消され開放せられる。信の人が、無条件に、全我を捧げて、無限の未来に生きてゆくのはそれがためである。

絶対無条件の努力精進、大報謝、大歓喜の生活は、ただこの信の人のみに与えられる。われらが団の使命「仏国土建設の大業」は、ただこの不惜生命の人によって成されるのだ。しかしてかかる信はただ、如来の本願力によってのみ生まれる。

人生のあらゆる社会は、実にこの人を待っている。

しかして真人生はただこの人の手にゆだねられる。

全我の自覚を通して承認されない一切の論理は、人生のための害毒である。

積尊は自覚以前にあらゆる力を認めることを許さなかった。

五官の享樂だけが人生である人たち、

なさねばならぬことを成しとげてゆく人、

無条件に生きぬく人、

人生はこの三段階の人たちによって複雑に構成されたにぎやかな交響樂である。

だが、何一つとして真理海中を出ているものはない。一切は真理によって明暗の二境を造って呼吸している。真理は、人間の自力小我が承認しようとすまいと、それ自体独立して永遠に生きる。